

「日本語教育の参照枠」の活用のための手引き（案）

はじめに

目的：Can do をもとにしたカリキュラム開発の方法について事例を挙げつつ、
 分かりやすく示すこと、3つの事例を選んだ理由
 対象：日本語教育コーディネーター、日本語教師、日本語学習支援者など
 構成：第1章（理念）
 第2章（実践事例）
 参考資料等

第1章 「日本語教育の参照枠」とは

（一問一答形式で簡潔に示す）

【取りまとめの背景と目的】

- (1) どうして「日本語教育の参照枠」が作られたのですか？
 →日本語学習における継続性の確保、共通の指標を用いた評価の必要性
- (2) 目的は何ですか？ どのような人が参照するのですか？
 →第二言語、外国語としての日本語教育の推進
- (3) 「日本語教育の参照枠」の普及によって期待される効果はどのようなことですか？
 →学習者、日本語教師、教育機関、行政機関、試験機関について言及する

コラム① 児童生徒に対する日本語教育

○認知的な発達段階に応じた日本語教育の重要性について

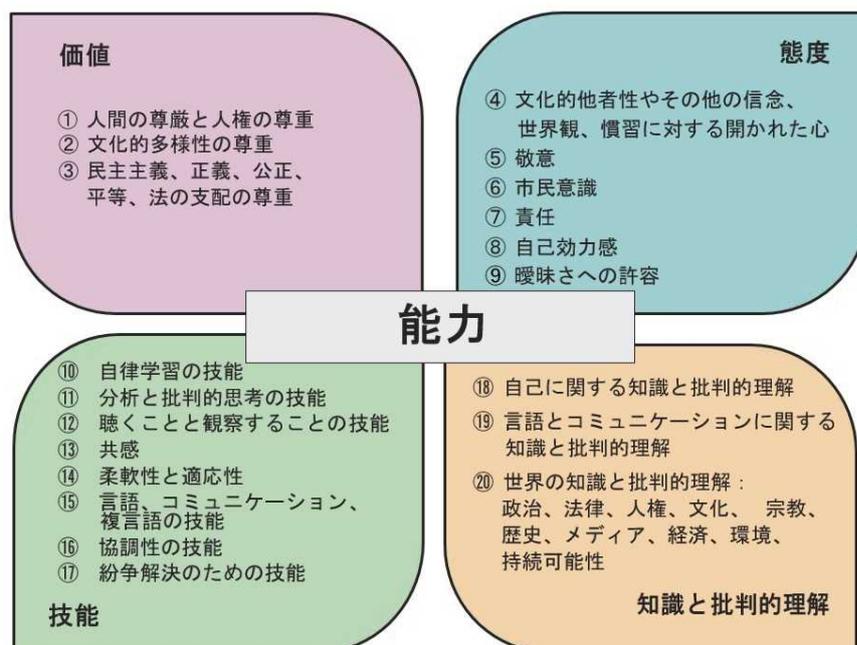
【理念と日本語能力観】

- (4) 言語教育観の三つの柱とは何ですか？
 →社会的存在、「できること」に注目する、多様な日本語使用の尊重
- (5) 日本語能力をどのように捉えているのですか？
 →一般的能力、コミュニケーション言語活動・能力、部分的能力
- (6) どのようなレベル尺度を用いているのですか？
 →全体的な尺度、言語活動ごとの熟達度など

コラム② Competences for Democratic Culture が示す能力と日本語教師に求められる資質・能力について

- 欧州評議会（2016）Competencies for democratic culture: living together as equals in culturally diverse democratic societies（『民主的文化のための能力 -文化的に多様な民主主義社会の中で平等に共存していくために』）では、民主主義社会の中で多様な文化を尊重し共存していくための能力を「民主的文化のための能力」とし、そのための20の能力を示している。

民主的文化のための能力に含まれる20の能力



- CEFR では、言語使用に関わる能力には、言語運用能力や文法的知識以外にも、意欲、態度、価値観などが含まれるとして、これらを一般的能力として示している。Can do をもとにしたカリキュラムを作成するにあたっては、このような広範な能力の育成を視野に収め、どのような能力を Can do で示すのかについて検討する必要がある。
- 「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」では、日本語教師に求められる資質・能力を、知識・技能・態度の三つに分けて示しており、上記20の能力と共通する部分がある。日本語学習を通じて上記のような能力を育成していくためには、まずは教師がそれらの能力についての研鑽に励む必要がある。

【Can do について】

- (7) Can do とは何ですか？ どのような経緯で作られたのですか？
→CEFR、JF 日本語教育スタンダードなど
- (8) Can do には、どのような種類がありますか？
→活動、方略、テキスト、能力の四種類がある
- (9) Can do をベースにしたカリキュラムで授業はどのように変わりますか？
→日本語教育における各分野の実践紹介

コラム③ 外国語教育における Can do の活用の事例
・各言語（英、仏、独、中、韓など）における活用の事例

【評価について】

- (10) 評価の三つの理念とは何ですか？
→自律学習、多様な評価手法の提示、評価基準と手法の透明性の確保
- (11) 日本語能力をどのように評価するのですか？
→試験、パフォーマンス評価、ポートフォリオ等
- (12) Can do を評価にどのように用いるのですか？
→自己評価チェックリスト、パフォーマンス評価におけるルーブリック

コラム④ 英語教育における CEFR-J の取組
・学校教育における CEFR-J を用いた英語教育実践の事例

1. Can do をベースにしたカリキュラム開発の方法について

(1) どのようにコースをデザインしたらいいですか？

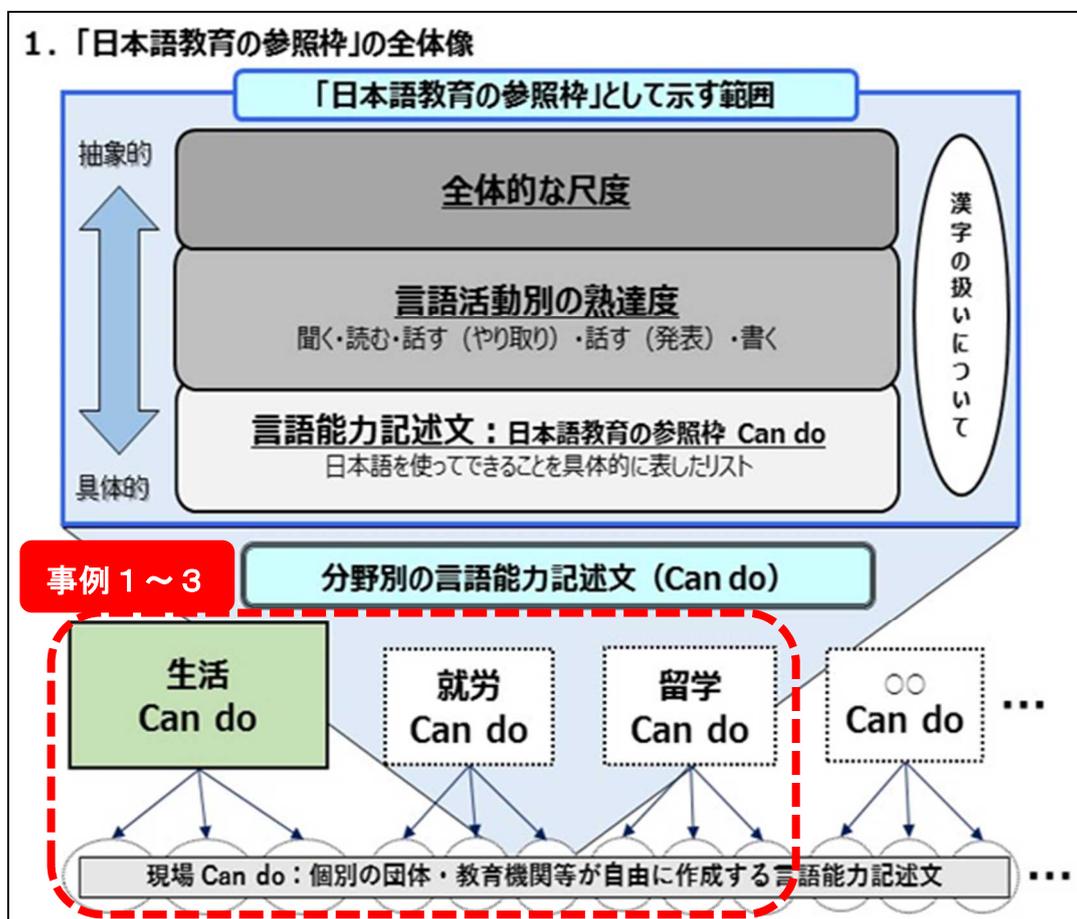
- ①コースデザインを行う上で重要になる視点（考え方）
- ②コースデザインの概説
- ③バックワード・デザイン（逆向き設計）
- ④シラバスへの Can do の組み込み方

(2) 評価はどのようにしたらいいですか？

- ①テスト
- ②パフォーマンス評価（ルーブリックの作成）
- ③ポートフォリオ評価

2. Can do をベースにしたカリキュラムの事例等

分野別 Can do の事例として、生活 Can do, 就労 Can do, 留学 Can do の3つのカリキュラムデザインの一例を紹介する。3つの事例の特徴について説明する。



生活：学習支援者の学びと振り返りを視野に収めた事例

留学：教育理念を定め、長い時間をかけて改善を続けている事例

就労：日本語教育に関わる様々な人々との協働のもとに作り上げた事例

生活、留学、就労の事例紹介の項目

- ①カリキュラム開発の経緯、背景、開発者の思い
- ②カリキュラムの対象、目的、特色
- ③カリキュラム開発のプロセス（Can do をどのように選んだ/作ったのか）
- ④評価の方法
- ⑤運用した結果、効果
- ⑥課題
- ⑦カリキュラム、学習活動、ポートフォリオのサンプル

事例 1. 生活 SIC 訪問日本語コース カリキュラム

①カリキュラム開発の経緯、背景

島根県と（公財）しまね国際センターは、SIC 訪問日本語コースを開設している。コースの目的は、日本語教室に通えず日本語能力が不十分であるために、地域に溶け込めず孤立している外国人住民を一人でもなくし、地域社会の一員として生活できるように支援することである。コースは、基本的に1対1で行われる。外国人住民は、「生活場面」や「交流場面」に必要な日本語や運用スキルを習得し、日常生活や周囲との人間関係作りに役立てることが期待されており、日本語学習支援者は、学習支援を行うとともに将来的に外国人住民と地域とをつなぐ役割を担うことが期待されている。2018年に「A1～A2.1レベルのカリキュラム」を開発し、同年にコースを開始した。運用した結果、有効性と共に課題も報告されたため、2020年に新たに「A1レベルのカリキュラム」の開発を行った。

②対象、目的

| | A1～A2.1レベルのカリキュラム | A1レベルのカリキュラム |
|----|---|--|
| 対象 | 外国人住民：日本語教室に通えない初級学習者（JLPT N5程度：A1～A2レベル） 日本語学習支援者：外国人住民の支援や交流に関心がある人（日本語学習支援未経験者を含む） | |
| 目的 | <p>[外国人住民]</p> <p>① 日本語を使って<u>基本的な生活行為ができる。</u></p> <p>② 日本語を使って<u>周囲の人と交流できる。</u></p> <p>③ <u>自律学習のスキルや姿勢</u>を身につける。</p> <p>[日本語学習支援者]</p> <p>①「<u>やさしい日本語</u>」を意識的に使える。</p> | <p>[外国人住民]</p> <p>① 日本語を使って<u>周囲の人と交流できる。</u></p> <p>[日本語学習支援者]</p> <p>①「<u>やさしい日本語</u>」を意識的に使える。</p> <p>② <u>パートナーとしての意識</u>を持ち、「<u>対話の姿勢</u>」で<u>交流する</u>ことができる。</p> |

③カリキュラム開発のプロセス

カリキュラムは、地域日本語教育に携わる日本語教師と大学教員が、第二言語習得理論や技能を基盤とした教授法(Competency-Based Language Teaching)並びにコミュニケーション言語教授法の考えを参考に開発した。シラバスは、技能基盤シラバス(Competency-Based Syllabus)で、外国人住民の生活環境や『標準的なカリキュラム案(文化審議会国語分科会)』、CEFRの「共通参照レベル」「活動 Can-do」を基に作成された目標言語課題と課題遂行に必要な言語項目で構成されていた。このシラバス項目を話題ごとに10課に分け、各課の到達目標と評価で用いるパフォーマンス課題を定めた。次に、CEFRの「共通参照レベル」と扱う文型の複雑さを考慮して課の配列を行った。最後に、日本語学習支援未経験者が支援しやすいこと、学習者の自ら学ぶ力を育てることを念頭に、指導手順を定めた。

④評価の方法

パフォーマンス課題や活動の自己評価。ルーブリックは提示せず、単純に3段階で評価を行う。

⑤運用した結果、効果

「A1～A2.1レベルのカリキュラム」コース参加者の声(2018～2020)

[ブラジル人女性] 「(省略)このコースでは、スーパーでの色々なことが一人でできるようになったり、聞けるようになったり、息子の通っている保育園で先生と簡単なことが通訳なしで話すことができるようになりました。病院にも一人で行くことができました。」

[日本人女性] 「(省略)日本が大好きだという姿勢、日本語の勉強への意欲に感銘を受けました。また将来、日本語教師になりたいと強く考えるきっかけになりました。」

「A1レベルのカリキュラム」コース参加者の声(2021～)

[中国人女性] 「ローマ字入力ができるようになり嬉しい。日常会話が問題なくできるようになりたい。」

[日本人女性] 「交流できるのが楽しい。意外なところを難しく感じている時があり新しい発見もある。」

⑥課題

「A1～A2.1レベルのカリキュラム」は、「学習者のレベルが想定よりも低いこと」、「あまり身近ではない言語行為が含まれていること」、「各課の学習項目が多いこと」、「日本語学習支援未経験者にとって活動が難しいこと」などの課題が判明した。「A1レベルのカリキュラム」の課題は、調査中である。

⑦カリキュラムのサンプル（全10回、学習内容、項目、使用教材等を示した表）

| | A1～A2.1レベルのカリキュラム | A1レベルのカリキュラム |
|----|---|--|
| 時間 | 15時間(90分×10回) | |
| 教材 | 「いっしょににほんごしまねけん」全10課 | 「となりでにほんご」全10課 |
| 手順 | 1)Can-do 確認 2)絵による語彙確認 3)聴解(意識化) 4)文型説明 5)運用練習 6)パフォーマンス課題 7)自己評価 | 1)Can-do 確認 2)翻訳による表現・語彙確認 3)対話活動 4)会話練習 5)スピーチ練習 6)自己評価 7)発展会話 8)文字変換学習 |

[A1～A2.1レベルのカリキュラム]

| | 目標言語課題 | 言語項目 |
|---|---|---|
| 1 | a)家族や友だちに挨拶をしたり、短い会話をしたりすることができる。(A1) b)家族や友だちに感謝や謝罪の気持ちを伝えることができる。(A1) | ・「おはよう」「こんにちは」 ・「あついですね」 ・「じゃあ、また」 ・「すみません」など |
| 2 | a)自分の名前や出身、仕事、家族について話すことができる。(A1) b)写真を見せながら、家族や友達について紹介することができる。(A1) | ・「私は(李)です」「(中国)人です」 ・「私は(会社員)じゃありません」 ・「家族は(4人)です」 ・「これは(私の父)です」など |
| 3 | a)写真や地図を見せながら、自分の国や町の様子について話すことができる。(A1) b)写真や地図を見せながら、自分の国や町の様子について話したり、相手の質問に答えることができる。(A1) | ・「(ホーチミン)は(ベトナム)の(南)にあります」 ・「(バインミー)が有名です」 ・「(高い)(ビル)があります」など |
| 4 | a)店で欲しい商品があるかを尋ねることができる。(A1) b)郵便局で、いくらか、どのくらい日数がかかるかなど尋ねることができる。(A2) c)商品の表示を見て、商品の種類や賞味期限など必要な情報を理解することができる。(A1) | ・「(トマト)はありますか」 ・「(航空便)はいくらですか」 ・「(6日)かかります」 ・「賞味期限」「豚肉」「割引」 「無料」「お酒」など |
| 5 | a)自分の好きな事や、休みの日の過ごし方、普段の生活について話したり、尋ねたりすることができる。(A2) b)週末の予定や週末した事を話したり、尋ねたりすることができる。(A2) | ・「(読書)が好きです」 ・「よく(アニメ)を見ます」 ・「(スーパー)で買います」 ・「(昨日)(勉強)しました」など |
| 6 | a)親しい人を誘うことができる。親しい人から誘われた時に、了解したり、柔らかく断ることができる。(A2) b)友達と会う約束をし、いつ、どこで会うかを話し合うことができる。(A2) | ・「(お祭り)があります」 ・「(行き)ませんか」 ・「(カラオケに)(行き)たいです」 ・「(土曜日)はどうですか」など |
| 7 | a)緊急地震速報などを観て、簡単な注意や避難指示を聞いて理解することができる。(A2) b)避難所で自分が話せる言語を相手に伝えたり、簡単な指示を聞いて理解することができる。(A1) c)自分から手伝いを申し出ることができる。(A2) | ・「(大雨)に注意してください」 ・「震度」「松江」「浜田」 ・「(英語)ができます」 ・「(食べ)てください」 ・「(持ち)ましようか」など |
| 8 | a)家族や医師に自分の体調について話したり相手の質問に答えることができる。(A1) b)薬の袋の表示を読んで、いつ飲むのか、一回にどれくらい飲むのかについて理解することができる。(A1) | ・「(頭)が痛いです」 ・「熱があります」 ・「(運動し)てもいいですか」 ・「1日(2)回」「食前・食後」など |

| | | |
|----|---|--|
| 9 | a)ハローワークや会社の面接で、希望の仕事やできること、仕事の経験について話すことができる。(A2) b)会社に遅刻や欠勤の連絡を行う際、遅刻や欠勤の理由を簡単に伝えることができる。(A2) e)職場でのルールを理解することができる。(A1) f)アルバイト募集のチラシを見て、仕事の内容、時間、給料を理解することができる。(A1) | ・「(コンビニ)で働きたいです」 ・「(コンビニ)で働いたことがあります」 ・「すみませんが(熱があります)」 ・「(休憩し)てもいいですか」 ・「曜日」「給料」「勤務地」 「レジ」「製造」など |
| 10 | a)学校に欠席や遅刻の連絡をしたり、子どもの体調などについての学校からの連絡を理解できる。(A2) b)子どもの普段の様子を担当の教師に話すことができる。(A2) | ・「(熱があります)から、休みます」 ・「服が汚れました」 ・「あまり(話し)ません」 ・「よく(食べます)」など |

[A1 レベルのカリキュラム]

| | 目標言語課題 | 言語項目 |
|----|--|--|
| 1 | a)日常の挨拶をすることができる。(A1) b)学習に必要な言葉を理解することができる。(A1) c)簡単な自己紹介をすることができる。(A1) | ・「おはよう」「こんにちは」 ・「(聞いて)てください」 ・「私は(李)です」 ・「(上海)出身です」など |
| 2 | a)自分が好きなことについて話すことができる。(A1) | ・「(料理)が好きです」 ・「よく(料理)をします」など |
| 3 | a)出身地の有名な所について説明することができる。(A1) | ・「(ソウル)は(にぎやか)です」 ・「(市場)がおすすめです」など |
| 4 | a)出身地の有名な料理について説明することができる。(A1) | ・「おいしいです」「辛いです」 ・「スープ」「(肉)の料理」など |
| 5 | 1)から 4)の復習。1)から 4)を用いて日本語学習支援者と対話(交流) | |
| 6 | a)自分の食生活について話すことができる。(A1) | ・「(パン)を食べます」 ・「(水)を飲みます」 ・「(料理)を作りません」など |
| 7 | a)自分の一日の生活について話すことができる。(A1) | ・「(7 時)に起きます/寝ます」 ・「(テレビ)を見ます」など |
| 8 | a)休みの日にしたことについて話すことができる。(A1) | ・「(浜田)に行きました」 ・「(8 月)に行きました」 ・「(海)で遊びました」など |
| 9 | a)欲しいもの、したいことについて話すことができる。(A1) | ・「(自転車)がほしいです」 ・「(買い物)をしたいです」など |
| 10 | 5)～9)の復習。5)から 9)を用いて日本語学習支援者と対話(交流) | |

事例 2. 留学 コミュニケーション学院のカリキュラム

①カリキュラム開発の経緯、背景

・1988年～

「コミュニケーション:わかちあい」を建学の精神とし、「異文化間教育としての日本語教育」(文化移動や異文化接触を契機とする人間形成・発達等に関わる日本語教育。マイクロレベル:人格の拡張・新たなアイデンティティ・自己感の形成、メゾレベル:地域社会の維持・発展・共生、マクロレベル:教育を通じた世界の平和の維持・構築に寄与する日本語教育)開始。

「社会的行動様式四分類」を作成し、シラバス・カリキュラムを設定。

- 1) 知的行動の仕方(ものの感じ方、考え方などの大脳行動も含む)
- 2) 相互作用的な行動の仕方(闘争や交渉、協調の仕方など)
- 3) 物、自然に対する行動の仕方(食料品の生産、芸術品の作り方など)
- 4) 超越的存在に対する行動の仕方(超越的存在の想定と交流の仕方など)

学習対象:スキーマ理論の応用。コーパスの収集と教材化『日本語コミュニケーション』。

・1990年代～

CEFRの中心的な理念「Action-oriented approach(行動指向アプローチ)」に注目。

・2000年～

日本語コミュニケーションを実質的に行う能力を「場」と「機能」のマトリクスで捉え、「社会的行動様式四分類」によるシラバスを詳細化(注1)。

・2001年～

CEFR公開。CEFRを参照しつつ、カリキュラム改訂。

参照したもの:言語教育・学習の目標(自律的学習者・学習者オートノミー育成、熟達レベル、カリキュラムの透明性、例示的能力記述文、ポートフォリオ学習)

・2008年

平成19年度文化庁委嘱事業「生活者としての外国人のためのモジュール型カリキュラムの開発と学習ツールの作成」

・2010年～2017年

「Can-do Statements 研究会」において、日本語学校における進学予備教育の到達目標スタンダード作成(注2)。

・2015年 日振協版日本語スタンダードの開発協力・参照

・2018年～現在

CEFR/CVで具体的な尺度が示された「mediation」のカリキュラム化を検討中。

②対象、目的

対象:(日本語)留学生(進学を目指す人、就職する人、趣味や教養として学ぶ人)

目的:①言語使用域におけるニーズ:日本語を使ってキャリア形成(進学・就職)、社会文化的生活を実践すること。②人格形成上のニーズ:教養(リベラル・アーツ)としてのことば、「わたし」という人格を形成することば。ことばが個人、社会、世界に対して根源的に持つ力を学ぶ。

③カリキュラム作成のプロセス

- ・「行動様式四分類」の中で特に言語 Comm.に特化した部分については、CEFR の熟達レベル、評価、学習の方法を参照し、2年間の到達レベルごとの包括的な目標を設定。
- ・言語的な発達段階(3か月ごと8段階、全2年間)を縦軸に、領域(科目群)を分類して横軸に配置。目的と目標を記述。まず全体、次に3か月ごと、そして科目ごとに細分化した到達目標を記述。(別紙1「2年課程全体のカリキュラム概要」参照)
- ・教材・方法・評価方法をレベルごとに記述。(別紙2「B2-2レベルの読解カリキュラム例」参照)

表1 コミュニカ学院のレベル設定

| コミュニカ学院 レベル名 | 共通参照 レベル |
|-----------------|-------------|
| Step1+ | C1 |
| Step1 | B2.3 |
| Step2 | B2.2 |
| Step3 | B2.1 |
| Step4 | B1.3 |
| Step5 | B1.2 |
| Step6 | B1.1 |
| Step7 | A2.2 |
| Step8 | A0-A2.1 |

表2 コミュニカ学院 カリキュラム概要【科目群・2年課程】

| 科目群 | 科目・内容 | コマ数 3か月 |
|----------|--|-------------|
| 日本語プロパー系 | 日本語コミュニケーション、 発信表現、記述、読解、聴解など | 121～ 175 |
| キャリア系 | 大学・大学院進学演習、 JLPT・EJU・BJT対応、 日本就職事情、ビジネス日本語など | 0～36 |
| ダイバーシティ系 | 異文化理解、 ランゲージ・アウェアネスなど | 9～18 |
| マネジメント系 | ポートフォリオ学習など | 4～8 |
| その他 | 行事(式典、オリエンテーション等) | 8～12 |

④評価の方法

- ・到達度の評価:バックワードデザインによる評価ツールの作成。これができるれば目標を達成したと言える学習成果を確定し、学習開始前に評価ツールを作成する。
- ・評価ツール:従来型筆記試験、代替的評価(パフォーマンス評価、自己評価、ピア評価)など。
- ・パフォーマンス評価は、発信系科目で口頭または筆記でのコミュニケーション課題について、達成度をルーブリックで評価。
- ・熟達度評価:従来型のプロフィシエンシー・テスト、外部評価(J-CAT など)、ポートフォリオ評価、自己評価。

⑤運用した結果、効果

- ・学習者が日本語を使って何ができるようになったかをメタ認知できるようになった。
- ・自分で自分の学習をコントロールする能力が付き、エンゲージメントが起きる。
- ・学習者としての自己への理解が深まる。
- ・学習に対する自律的な態度(オートノミー)が形成される。

(→具体的には、自分の学習上の課題が明確になり、主体的に受講科目や進級ないし再履修を選択する学生が増えた。)

⑥課題

- ・包括的な能力育成を目的に、教育の場面に落とし込む際、包括的な能力記述文をより具体的な Can do(要素)に還元したとして、個々の要素を習得すれば、包括的な能力を身につけたと言えるのか。要素還元主義の罠をいかに避けるか。
- ・経験ある教師でも、参照枠やレベル区分やレベル判定には不慣れな場合があるため、十分な教師研修が必要。
- ・mediation, オンラインのスキルなどを、いかに教育実践に落とすか。

⑦カリキュラムのサンプル

表 B2-2レベルの読解カリキュラム例(全16回、32コマの概要)

注1)「場」とは、特定の文化集合が発揮する方向性をもった力学的な力であり、文化的文脈を形成するものである(宇野、1990)。「機能」とは、ある行動がどのような目的で行なわれるか、ということ。ここでは、この二つを用いて、日本語学習者が日本で遭遇したり、話題として取り上げられたりする可能性のある行動を整理。

注2)到達目標を「言語学習系」と「非言語学習系」の2分野に分け、さらに「言語学習系」を「アカデミック」「キャンパス」「生活」の3領域に、「非言語学習系」を「学習コントロール」と「進路決定」の2領域に、計2分野、5領域に分類し、CEFRを参照し、スタンダードをCan-do形式で表示。

参照文献

奥田純子(2016)「学習の『選び直し』を通じた学習者オートノミーの支援」『ことばと文字』2016年

6月号「国際化時代の日本語と文字を考える」くろしお出版, pp.46-55.

コミュニカ学院(2001) 財団法人日本語教育振興協会平成12年度文部省補助事業「教材等研究・開発等」研究協力校調査・研究実績報告書「大学進学準備教育シラバスの再考——『日本留学のための新たな試験』への対応課題を中心に(1)——」

コミュニカ学院(2008)『平成19年度文化庁委嘱事業「生活者としての外国人のためのモジュール型カリキュラムの開発と学習ツールの作成」』報告書

コミュニカ学院(2021)『2021年度コミュニカ学院イヤーブック』コミュニカ学院(未公刊)

日本語教育振興協会(2015)『日本語教育スタンダード』

Can-do Statements 研究会(2012)「Can-do Statesments 研究会活動記録 2010-2011年度 日本語学校における進学予備教育——到達目標スタンダードの作成」

Can-do Statements 研究会(2018)「Can-do Statesments 研究会活動記録 2012-2017年度 日本語学校における進学予備教育——到達目標スタンダードの作成」

表 B2-2レベルの読解カリキュラム例(全16回、32コマの概要)

| | |
|------|---|
| レベル | コミュニカ学院 Step2(B2.2) |
| 科目名 | 読解 |
| コマ数 | 32コマ(1回2コマ、全16回)、50分/コマ 期間:3か月 |
| 目的 | 幅広いジャンルやテキストタイプのオーセンティックな文章を読む力をつける。筆者の論点や意図を的確に把握できるアカデミック・リーディングの力を養い、クリティカル・リーディングへとつなぐ土台をつくる。また、エッセイや小説など文学作品などで楽しんで読むことを経験する。さらに、分量の多いものを辞書を引かずに、ある程度のスピードを持って読める読解力をつける。 |
| 到達目標 | <ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事やエッセイ、コラム、解説文を読んで、詳細な事実関係、論理展開、現状、展望、背景、因果関係、理由、根拠、筆者の主張など重要なポイントが把握できる。 ・身近な社会現象や、やや抽象的なテーマについて書かれたエッセイや解説文を読んで、その内容を概念的に整理して理解することができる。 ・エッセイや小説など、十頁程度の分量の読み物を、辞書を引かずに一息に読んで要旨を理解することができる。 ・{CR}書かれたことを正確に理解したうえで、テキストの内的整合性の観点から内容を批判的に検討でき、書かれたことを自分の考えや経験と照合することができる。 |
| 使用教材 | 『読む力—中上級』(くろしお出版)など |
| 学習方法 | 速読&全体把握、認知タスク&テキスト再読(読みの精緻化)、CR(クリティカル・リーディングの問い)による口頭でのディスカッションとコメント作成、ピアによる読み。スキル表による事前の評価と事後の学習のリフレクション(振り返り・内省・メタ認知を含む) |
| 評価方法 | 学習者による到達目標の設定と自己評価(ポートフォリオも活用)、筆記試験 |
| 回 | 到達目標 |
| 1 | 初回オリエンテーション(科目の目的・目標・評価、教科書の特徴、オートノマスに学ぶとは、授業の進め方、多読日記オリ、各自の目標設定) ・クリティカル・リーディングの概要・意義・必要性を知る |
| 2 | 教養書の一節を読み、筆者の問題提起、論点、主張、意図などが把握できる(その1) |
| 3 | 教養書の一節を読み、筆者の研究の動機と仮説の概要が把握できる(その1) |
| 4 | 教養書の一節を読み、筆者の研究の動機と仮説の概要が把握できる(その2) |
| 5 | 教養書の一節を読み、筆者の問題提起、論点、主張、意図などが把握できる(その2) |
| 6 | エッセイやコラムを読み、比較、対照、構造化、アナロジーをpushしながら、筆者の主張、意図が把握できる(その1) |
| 7 | エッセイやコラムを読み、比較、対照、構造化、アナロジーをpushしながら、筆者の主張、意図が把握できる(その2) |
| 8 | エッセイやコラムを読み、比較、対照、構造化、アナロジーをpushしながら、筆者の主張、意図が把握できる(その3) |
| 9 | 専門書の目次を読み、目的に応じて目次からその本で読むべき箇所を見つける(その1) |

| | |
|----|--|
| 10 | エッセイやコラムを読み、比較、対照、構造化、アナロジーを押さえながら、筆者の主張、意図が把握できる(その4) |
| 11 | ●試験返却、解答解説(学習の振り返りとメタ認知) 数十頁の分量の読み物を、辞書を引かずに一息に読んで要旨を理解できる(その1) |
| 12 | 専門書の目次を読み、目的に応じて目次からその本で読むべき箇所を見つける(その2) |
| 13 | 数十頁の分量の読み物を、辞書を引かずに一息に読んで要旨を理解できる(その2) |
| 14 | 専門分野の入門書の一節を読み、調査結果を比較、対照しながら、筆者の主張が把握できる(その1) |
| 15 | テキストの内容を批判的に検討でき、書かれたことを自分の考えや経験と照合できる |
| 16 | 専門分野の入門書の一節を読み、調査結果を比較、対照しながら、筆者の主張が把握できる(その2) ●3か月間の学習のリフレクション、自己評価 |

注)モジュール型カリキュラムのため、2回～15回の順序は問わない。

事例3. 就労 「定住外国人に対する就職支援における Can do ベースのカリキュラムデザイン」 (アウトライン)

①カリキュラム開発の経緯、背景

1)行政の枠組みの中でのカリキュラム開発

- ・「外国人就労・定着支援研修」(厚生労働省 委託事業 2015～)
- ・少子高齢化の進行と労働力人口の減少 ⇒外国人就労者に対するニーズの高まり。
- ・就職への意欲が高いと認められるにも関わらず、安定的な雇用に就くことが困難な未就業の定住者に対する就労支援。
- ・短期間(100時間程度)で就職活動・就労現場での課題を乗り切っていく一定の力を身につけることが求められる。

2)受講者の特徴

- ・身分に基づく在留資格をもつ者(職種に制限がない。以後、定住外国人と記す。)
- ・国籍、希望職種、学習経験、就業経験、在住地域が多様な定住外国人

3)開発者(JICE)の方針

- ・就職活動や職場でのコミュニケーションに参加するための手段としての日本語を身につけられるよう、課題達成型(タスクベース)の学習支援を目指す。
- ・受講者ひとり一人の多様な背景を活かした日本語学習支援を目指す。

⇒「日本語教育の参照枠」(あるいは CEFR)をベースにカリキュラムを開発したのではないが、「日本語教育の参照枠」における言語教育観との親和性が高い。

4)コースデザイン担当者・協力者・関係者

- ・事業委託者(厚労省)や、社会保険や労働法規の専門家(行政書士、社会保険労務士)、職場支援者(労働局・ハローワーク)、キャリア支援専門家、日本語教育専門家らと相談・連携して開発。

5)JICE の事例から分かること

- ・就労者に対する日本語教育の多様な現場の中でも、就職あるいは安定した就労を目指す人を対象としたカリキュラム開発のプロセスの一例。
- ・既存のカリキュラム(カリキュラムの背景にある理念、カリキュラムのもつ課題など)を再考する目的で「日本語教育の参照枠」を活かすことができる。
(※手引きの活用方法をどう示すのか。)

②対象、目的

1)本カリキュラムの対象者

- ・就職／安定した就労を目指す定住外国人(業種・職種が未確定の者多数)
- ・体系的な日本語学習経験のない受講者が多い。(自然習得の範囲)
- ・レベル1の受講者…「基礎段階の言語使用者」にあたる定住外国人

2)目的

- ・職場でのコミュニケーションに参加するための支援。
(業務の遂行、異文化理解、人間関係構築などを含む。)
- ※キャリアプランニング・就職活動の支援も並行して実施するが、ここでは扱わない。

③カリキュラム開発のプロセス

1)ニーズの把握

- ・企業等への調査をもとにどの業種・職種・職場でも共通の課題を特定。
⇒職場における日常的な範囲での情報交換、日常的な表現。
(事務的作業、労務、人間関係構築に関する課題)
- ※特定の業種・職種、特定の職場での課題は、シラバスに含まない。

2)目標の設定(※本「手引き」では、主に「やりとり」に関連する部分を中心に抜粋。)

■職場におけるコミュニケーション課題を Can do の形で記述

- ・行動目標:「職場における課題」の設定
(事務的作業・労務・人間関係構築に関する機能)
- ・学習目標:行動目標を達成するために取り組む下位項目の課題の設定
(詳細なコミュニケーション課題のリスト)
⇒「社会言語能力」「言語運用能力」の視点を含む Can do も

■レベル1(基礎段階の言語使用者)が、職場で日本語を使ってできること

【行動目標の Can do の例】

- ・職場内で一緒に働く人に簡単に自己紹介ができる。
- ・仕事の簡単な指示を理解し、指示に沿った行動ができる。
- ・勤怠に関わる基本的な連絡や相談(例:遅刻の連絡、休暇取得の相談)ができる。

3)指導において日本語教師に求められること

- ・先行ロールプレイを実施し、学習目標の Can do をもとに確認・フィードバック
- ・談話展開例を介して就労場面に関する文化理解、自然習得では身につけにくい難しい表現などの理解を支援する。
例)生活場面との違い、母国との違い、非言語コミュニケーション等に注目。
- ・受講者の就労経験や既有知識をできるだけ共有してもらい、職場の多様性・個別性の理解を支援する。
例)職場によって適切なコミュニケーションのあり方が異なる可能性に注目。
- ※受講者は自身がどんな働き方を志向し、どんな仕事を探していくのかキャリアプランニングも並行して取り組む。

④評価の方法 ※参考資料(評価資料①～④)

- ・授業内でのフィードバックと自己評価(学習目標のリストを使用)
- ・ルーブリックを使用したパフォーマンス評価
- ・担当講師らによる観察に基づく総合的評価
- ・就職支援者(ハローワーク)への橋渡し:「できることリスト」の共有

⑤運用した結果、効果

- ・Can do による「職場における課題」の明示によって、教師と受講者の間で目標が共有できることによる効果。
- * 課題について、受講者の既有知識や就労経験の共有がしやすくなる。受講者同士の日本語や母語を駆使したやりとりが生まれ、受講者個人が、自身の目標について自覚的になる。
- * 課題達成の過程を Can do リスト(学習目標)でチェックすることができ、何ができるようになったか／なっていないのかが明確になる。その後の自分の目標を明確にできる。
- ・先行ローブプレイ、談話展開例を介した学び、Can do リストで自己評価するという一連の活動の効果。
 - * 日本の職場のマナーについて考えたり、自然習得では聞き取れなかった表現が理解できるようになったりすることで、就職活動での自信につながったという声が多い。自分の日本語力を駆使してやりとりを試みる姿勢につながっている。
 - * 談話全体を意識した一連の発話を意識できるようになる。
 - * のちに就職先で、その業種や職種に関わる研修などをする際に、現場で指導する人からもコミュニケーションがとりやすいという声がある。

⑥課題

- ・全国 23 都府県で授業が展開されるため、地域ごとの就労環境がある。Can do を基に組み立てられたカリキュラムの中で、現場の教師は、受講者が置かれた地域や個別の文脈の理解に努めながら、そのクラスに適した Can do や指導をアレンジしていく力なども求められる。
- ・求職中の定住外国人の日本語レベルは、生活者としての日本語使用環境とも連動しており、クラスに集まる受講者の背景は、非常に多様である。その点においても、受講者への個別の柔軟な対応が求められる。

⑦カリキュラムのサンプル(机上配布資料)

- ・Can do による職場のコミュニケーション課題 全 20 回

参考資料等

- ・ FAQ（一問一答形式）
- ・ 用語の解説：代替的評価、母語話者、CEFR増補版など
- ・ Can do の作成方法及び検証手法におけるガイドライン（一次報告の再録）
- ・ 「生活 Can do」の作成方法とリスト
- ・ Can do の質的、量的検証の例について
- ・ Can do に関する参考文献、報告書、ウェブサイト等